

スポーツ文化専攻入学前教育課題

1. 課題

下記に転載している二つの論考 A. 「聞こえない感動のピストル 復興からもはるかに遠く」(ロバート キャンベル)、B. 「『不要不急』の先の世界 暮らしの想像力を広げる」(磯野 真穂) を読み、いずれかのテーマを選び、作成要領に従ってレポートを完成しなさい。

2. 作成要領

- ・全体で 1,600~2,000 字にまとめてください。
- ・レポートの内容は、段落やパラグラフ構成を適切にしながら、次の 3 (もしくは 4) 点についてまとめてください。丸数字の記載は不要です。
 - ①テーマ設定から導かれた自分自身の問題意識からなる「序論」
 - ②キーワードに関して調べ、考察したことがらの要約を含めた「本論」
 - ③調査した内容、本論から導かれた自分自身の考えによる「結論」
 - ④引用・参考文献がある場合にはその書誌情報(引用順、著者・サイト名の 50 音順に並記)

【書誌情報の記載内容】

書籍：著者名、題名、出版社名、刊行年

インターネットサイト記事：記事のタイトル、サイト名、URL、参照年月日

3. 課題テーマ

A. 「聞こえない感動のピストル 復興からもはるかに遠く」(ロバート キャンベル)

①テーマ

夏季オリンピック大会 TOKYO2020 を通して考えたこと

②テーマ設定の趣旨

オリンピックを通して、あらためて競技スポーツのすばらしさ、選手にまつわる物語、メガスポートイベントの功罪、コロナ禍の不安など多様な問題意識が、メディアで提示されていました。ロバート・キャンベル氏は、「五輪への疑問をそのままに、選手の多様な表現に触れ、五輪という体験を豊かに膨らませることは可能」だと述べています。

それでは、あなた自身は五輪を通してどのような体験をし、その体験から何を考えたかまとめてください。

③キーワード

United by Emotion、オリンピックの光と影、五輪というレンズ

B. 『『不要不急』の先の世界 暮らしの想像力を広げる』(磯野 真穂)

①テーマ

夏季パラリンピック大会 TOKYO2020 を通して考えたこと

②テーマ設定の趣旨

日本パラリンピック委員会は、「様々な障がいのあるアスリートたちが創意工夫を凝らして限界に挑むパラリンピックは、多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場」とし、パラリンピックは「共生社会」のきっかけとなると言われています。それを磯野真穂氏は、「全力の余暇が、観客の暮らしの想像力を広げる」と表現していたのでしょうか。

それでは、あなた自身はパラリンピックを通してどのような創意工夫に気づき、どのように想像力を広げられたかまとめてください。

③キーワード

パラリンピックの意義、余暇の外側、共生社会

4. 課題「論考」

A. 聞こえない感動のピストル 復興からもはるかに遠く

スポーツの祭典の最高峰に光を求めたい。のに、エモーションが湧かない。選手の汗と技量に心からのエールを送りたいけれど、感動のピストルが聞こえない。

東京五輪・パラリンピックのモットーは「United by Emotion (感動で、私たちは一つになる)」である。元々、英語の「エモーション」という言葉には心拍数が上がらない、どこか冷たい響きがある。しかし感動が湧かないのは、無観客で観戦がフラットな画面からしかできないためだけではない。東京都内では1日の新規コロナ感染者が2千人に迫り、「第5波」のただ中にある。国際オリンピック委員会のバッハ会長と大会組織委員会が誇るバブル方式には、数え切れないほどの穴が開いている。だが、それだけが理由でもない。

コロナ禍で孤独に耐えつつ練習を続けた選手たちの姿を映し出す開会式の映像を見ながら、頭をよぎるものがあつた。それは裏切られた期待と、居場所を無くした人々を巡る私の長い記憶である。

8年前の9月8日早朝(日本時間)、2020年の夏季五輪の開催都市が「東京」と決まった直後にその決定を人はどう見たのか、SNSで声を拾ってみた。すると、明るい言葉の一つひとつには、重いメッセージが込められていた。

例えばその日の午前5時23分のある人の発信。「2020年オリンピック開催地、東京決定おめ!原発とか汚染水とかデフレとか解決目標期限ができたね」。若年層は、7年間で期限と捉え、課題解決の糸口を見いだそうと期待したらしい。

しかし現実には、五輪を追い風に改善された社会問題が皆無と言っていいほどである。開催発表の直後から日本政府が理念に掲げた「復興五輪」の下では、復興からも五輪憲章からも

はるかに遠い事態が起きた。

原発事故で発生した膨大な放射性物質の除染作業はずっと続く。一方、五輪関連の施設工事や東京の再開発に労働力は吸い取られ、東北は人出不足に陥った。外国人技能実習生が除染作業に駆り出されて問題になったこともあったが、それ以前から低賃金労働者が被災地に集められ、除染や廃炉作業に当たってきた。

彼らの中には、作業に直接起因しない既往症などを抱え、現地で命すら落とす者も相次いでいる。福島県南相馬市のある寺院は、引き取り手がいない「行旅死亡人」の遺骨を預かっている状態だという。

「復興」を妨げる側面を持った五輪に、今は心が躍らない人もいるだろう。だが私たちが生きる同じ時空に、一生分の緊張と感動に包まれた若い選手たちもそろった。彼らは異なる環境で育ち、それぞれの社会に生じる課題を抱えてやってきた。選手村や競技場から SNS で彼らの視線を共有しようとしている。

怒り、失望、懸念、そして希望。全ての光と影が今、五輪というレンズを通して私たちの前に映し出されている。五輪への疑問をそのままに、選手の多様な表現に触れ、五輪という体験を豊かに膨らませることは可能なはずだ。

(ロバート キャンベル、リレー評論「解説オリンピック」、『47NEWS』、2021.7.26 11:00 配信、

<https://www.47news.jp/6570756.html>)

B. 「不要不急」の先の世界 暮らしの想像力を広げる

暮らしというものをもっとみんなが大事にしたら、その暮らしを破壊するものに対しては戦うんじゃないか。(津野梅太郎著「花森安治伝—日本の暮(くら)しをかえた男」)

大政翼賛会のメンバーで、かの有名な評語「ぜいたくは敵だ!」の誕生に関わったと言われる花森安治の言葉だ。1948年から今に至るまで続く「暮らしの手帖」の初代編集長の花森は「暮らし」という言葉に並々ならぬ決意を込めていた。

「ぜいたくは敵」に象徴される太平洋戦争中のありとあらゆる日常の否定。それを戒めるため東京などの重点都市で配布される「自粛カード」。一つの大義のために暮らしを諦めることが絶対正義とされてゆく。その顛末(てんまつ)をこれでもかというほど見せられた花森は、「一人一人が自分の暮らしを手放さないように」という願いを込めこの雑誌を創刊した。

さて、それでは「暮らし」とはなんだろう。昨今のはやりの言葉を使えば、語る、踊る、食べる、集うといった、小さな「不要不急」の組み合わせがそれである。だからこそ、ある大義を前にすると暮らしをつくる一つ一つの素材は「どうでもよい」「ぜいたく」と一蹴される。

スポーツの語源をたどると「余暇」と解釈できる。でもその余暇は単にくつろぐことを意味しない。工夫と挑戦と努力が存在する。速く走ろうとすること、より高く跳ぼうとするこ

と。そこにそれ以上の意味はない。しかし己の限界を超え出ようという「余暇」に全力で興ずる人々の姿は、それ自体が隠喩として、その余暇の外側に響く。

64年に東京で開かれ、パラリンピックの名を広めるきっかけとなったとされる東京パラリンピックは、まさにそのような場であった。佐藤次郎著「1964年の東京パラリンピックすべての原点となった大会」によれば、この大会は、おしめをつけて家に閉じこもるしかないと思われていた脊髄損傷者の暮らしに対する世間の思い込みを覆し、障害者の就労支援を加速させるドライブとなり、「健常者」と同じ暮らしを送ることをすっかり諦めていた日本人選手たちの意識を変えた。余暇を突き詰めた先に、余暇の外側の世界のありようを変える力が芽生えた。

あれから半世紀以上が経過した。オリンピックとパラリンピックにこれほどの逆風が吹いたことがあったらどうか。不透明な金の流れ、危機管理体制の矛盾といった構造はもちろん批判されるべきだ。しかし声援を送ることすらはばかれる雰囲気、出場選手に罪悪感すら抱かせる今の空気はいかがなものか。だからこそ、私は選手たちに次のエールを送りたい。

皆さんの全力の余暇が、観客の暮らしの想像力を広げますように。そして何よりも、あなたの暮らしに人生最高の一瞬が訪れますように。

頑張ってください。

(磯野真穂、リレー評論「解説パラリンピック」、『47NEWS』、2021.8.27 7:00 配信、<https://www.47news.jp/6708604.html>)

5. キーワード解説

A. United by Emotion、オリンピックの光と影、五輪というレンズ

・ United by Emotion

東京2020大会モットーとして公表された言葉である。スポーツの力には「異なる感情であっても理解できる」共有体験があるという。多様性を認め合う「体験」をどのようにしたのか振り返ってみてほしいです。

(TOKYO2020組織委員会公式サイト <https://olympics.com/tokyo-2020/ja/news/news-20200217-01-ja>)

・ オリンピックの光と影

オリンピックにむけられた希望と失望、選手による光り輝く活躍と影を落とす不正行為、国際オリンピック委員会にみられる功罪など、対立する二項を具体的にどのように描き出すかが重要です。

・ 五輪というレンズ

事物を拡大して観察する顕微鏡のレンズか、物事の一場面を切り取るカメラのレンズとして捉えるのかで、考察の仕方も変わってしまうでしょう。いずれにしても、何を注視するのか意識付けが大切です。

B. パラリンピックの意義、余暇の外側、共生社会

・パラリンピックの意義

日本障がい者スポーツ協会は、「文化としてのスポーツを享受できる社会」、「スポーツを通じた活力ある社会」、「人にやさしい共生社会」を創造するために、障がい者スポーツの理念を掲げていることが参考になります。

(公益財団法人日本障がい者スポーツ協会公式サイトより <http://www.jsad.or.jp/about/vision.html>)

・余暇の外側

この「余暇」とはスポーツ（パラリンピック）の世界であり、非日常的な世界です。その外側とは、日常的な生活世界のことです。ただ、その世界は、障がい者と健常者の間の物理的、心理的な壁のある社会でもあります。

・共生社会

共生社会とは、人種や国籍、宗教、性別、学歴、年齢、そして障害の有無といった個性に関係なく、お互いに尊重して支え合い、多様な価値観を認め合う全員参加型の社会のことです。